

(様式2)

[成果情報名] 主枝候補枝を有するカンキツ1年生大苗の育成技術

[要約] ウンシュウミカンにおいて、主枝候補枝を2～3本確保した1年生大苗は、6月に春枝を摘心し、BA液剤を散布した後に発生する夏枝、秋枝を管理することで育成できる。一方中晩柑においては、春枝摘心後の夏枝が多く発生するため、BA液剤の散布は不要である。

[キーワード] カンキツ、1年生大苗、主枝候補枝確保、BA液剤

[担当部署] 苗木・花き部；苗木チーム、果樹部；果樹育種・栽培チーム

[連絡先] 0943-72-2243

[対象項目] 果樹

[専門項目] 栽培

[成果分類] 新技術

[背景・ねらい]

カンキツ生産においては、改植に伴う未収益期間の短縮のため、主枝候補枝を有する2年生苗の需要が高い。しかし、2年生苗は掘り上げた1年生苗（棒苗）を露地圃場に再定植し、さらに1年間養成するため、植え替え作業や長期の栽培管理にかかる労力負担が大きく、需要に対して供給不足となっている。

そこで、カンキツ産地から求められている早期樹冠拡大が可能な主枝候補枝を有する大苗について、より短期間に安定的に育成できる技術を開発する。（要望機関名：苗木農協（R2））

[成果の内容・特徴]

1. 主枝候補枝を2～3本確保した1年生大苗は、慣行の1年生苗（棒苗）と同じ期間で育成可能である（図1、図2）。また、1年生の大苗は、2年生苗と比較して掘り上げ回数が2回から1回に減少でき2年目の植え替え作業も不要となる。掘り上げと植え替えに係る作業時間は約1/4に低減できる（データ略）。
2. ウンシュウミカンでは、6月に春枝を摘心し、その後にBA液剤を100倍で散布することで、多くの夏枝を確保できる（表1）。一方、中晩柑においては、春枝摘心後の夏枝が多く発生するため、BA液剤の散布は不要である（データ略）。
3. 1年生大苗は慣行の1年生苗よりも地上部の総生育量が優れ、地下部の生育も優れる（表2）。

[成果の活用面・留意点]

1. 1年生大苗の生産・活用マニュアルを作成し、苗木及びカンキツ生産者に普及を図る。
2. 2年生苗は購入2年前に注文する必要があるが、1年生大苗は前年の注文で入手可能である。
3. 1年生大苗からは慣行の1年生苗と異なり、翌年に使用する穂木の採取ができないため、別の手段で穂木を確保する必要がある。
4. BA液剤の散布効果は、ウンシュウミカンの「早味かん」「宮川早生」「青島温州」、中晩柑の「不知火」「みはや」「あすき」、レモン、ユズ、ヘベスにて確認した結果である。

[具体的データ]

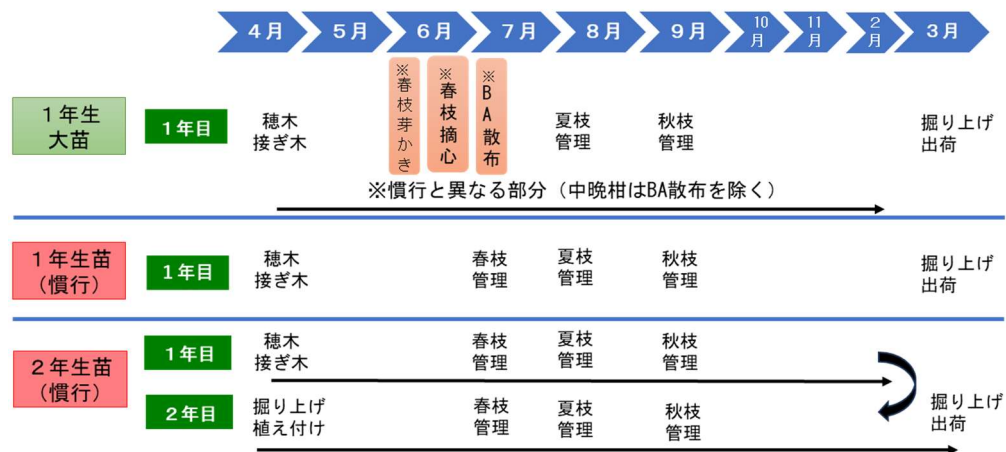


図1 1年生大苗と慣行苗の育苗スケジュール



図2 カンキツ「宮川早生」の1年生大苗（左）と慣行1年生苗（右）

表1 ウンシュウミカンにおける品種とBA液剤散布による夏枝発生数の違い（令和3年）

B A液剤散布	夏枝発生数（本）		
	早味かん	宮川早生	青島温州
処理	10.6	10.8	9.6
無処理	4.2	2.8	2.0
有意差	**	**	**

注）統計はt検定により**は1%水準で有意差あり。BA液剤は100倍で使用。

表2 「宮川早生」における育成方法の違いによる苗木の生育量の違い（令和4年）

樹形	総生育量		器官別生体重	
	新梢(cm)	葉数(枚)	地上部重(g)	地下部重(g)
1年生大苗	183	116	152	69
慣行1年生苗	82	39	109	49
有意差	**	**	**	**

注）統計はt検定により**は1%水準で有意差あり。令和4年11月1日調査。

[その他]

研究課題名：カンキツの大苗育成と幼苗期の栽培管理技術の開発

予算区分：農水委託プロ

研究期間：令和2～6年度

研究担当者：津田宗一郎、松本和紀、姫野修一、朝隈英昭、松下竜一、竹元秀耀